
モンスターハンター～偽者の剣～

オヒテノー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター～偽者の剣～

【Zコード】

Z6440Z

【作者名】

オヒテノ一

【あらすじ】

初投稿です。投稿主は才能なんぞ皆無な中で書いております。お許しを。あらすじはひょんなことからハンターになってしまつたある男の子ががんばつていろいろなモンスターを狩つていく話です。ここ、おかしいんじゃない?といった所はドンドン教えてください。また、感想なんかうれちやうととても嬉しいです。批判でも嬉しいです。

プロローグ？（前書き）

まいしへお願ひこしますー。

プロローグ？

PM5時35分

凍土にて

（・・はあー・・・疲れた・・・寒い・・・）

凍えきつた凍土で大きめの重いリュックを背負つているとある旅の商人はゲンナリしながらそう思った。

商人の名前は『ミライ』。

彼は今からユクモ村に行く予定だった。

（でも次に行くユクモ村ってところは確かに温泉が名物だつて聞いたことがあるから、あつたまつてから次の村に行こうかな）

と、呑気な事を考えながら歩いていると横からモンスターの鳴き声が聞こえた。
怪物

彼は右の方を向いて少し考へると、

（この鳴き声はきっと『バギイ』だな。アイツらの吐き出す液はとても眠くなるんだよな。さつさと逃げよう）

そう思つて前を向いたミライだが目の前には例の『バギイ』がいた。

「チクショウ！－ もういやがるじやねえかよ！」

ミライは驚きつつも、全力で『バギイ』から逃げ出した。
しかし彼の荷物はとても重く、はつきり言つて絶望的なスピードで走っている。

そんなミライに『バギイ』が負けるわけがなくすぐに追いつかれ全体重をのせた体当たりが彼の背中にヒットした。

「うおー！」

幸い体当たりはミライ本人ではなく彼のリュックに当たった。しかし当然彼はバランスを崩してこけてしまつた。

「ぐぼつ・・・おっ俺はおいしくなんかないぞーー！」

半ば投げやりになりながら起き上がり、後ろに後ずさるミライ。とその時後ろから足音がした。

「・・・おこーそこ」の足音のやつ！それ以上こひだて来るなー

しかし足音はどんどん大きくなつていいく。

「なにやつてんだよ！聞こえねえのかー早く戻れつてー」そこにはモンスターがいるんだよー！

そしてその足音の張本人が姿をあらわした。

そのハンターは素早い動きで彼の背中に装備されている双剣を取り出し今すぐにでもミライを食べんとする『バギイ』の首を簡単に切り裂いた。

「・・・なんだあんたハンターだつたのか・・・・・たつ・・・助かつた～」

とてつもなくマヌケな声を発するミライにハンターは双剣をしまいながら、

「君！ケガはないね！」

そう聞かれてミライは、

「ありがとうございます。大丈夫です。」

と答えた。

ここでミライがハンターに対して敬語だったのは、べつにミライの頭がおかしい訳ではなく、単にハンターといつ職業がみんなの憧れであり、ヒーローのようなものだからだ。

この世界ではハンターがいるだけでほとんどの事が解決してしまつ、
そんな世界なのだ。

そして今回もそのハンターに解決してもらつたといつだけのはなし
だ。

しかしそまだミライは知らない、これからおこる惨劇に。

プロローグ？（後書き）

全体的にグダグダです。

多分これからつじつまが合わなくなることもあるでしょう。

そつとしておいてあげてください。

自己満足なんです。

プロローグ？（前書き）

2話目も連続で投稿します。

プロローグ？

pm4時23分

凍土（ユクモ村付近）にて

偶然助けてもらったハンターと話していくとミライとハンターとの間には共通点があった。

それはこれからの行き先だ。

ミライはこれからユクモ村へ行くのだが、奇遇なことにハンターの方もこれからユクモ村へ行くそうだ。

そういうことから2人は一緒にユクモ村へ行くことになった。

歩きながら聞くハンターの話はとても素晴らしいだった。

狩猟先で砥石を忘れて必死で狩猟エリアを駆けずり回ったという話には爆笑だったし。仲間が死んでしまったという話を聞いたときにはすこしく悲しい気持ちになれた。

そしてミライもハンターに旅をしている時の感動的な話をしていてと不意にハンターが立ち止まり、とても悲しそうな顔で笑っていた。どうしたのだろう。

と、思っていたがそんな顔もすぐに消え、もとの笑顔に戻った。
なんかマズイ事言っちゃったかな？と思つていたミライだったが、
そんなことはすぐに忘れまた話だした。

そしてしゃべり疲れた2人がとても寒かつたのでホットドリンクを飲んでいると、ついにソレは現れた。
ソレはふざけたようなバカデカイ声を発しながら2人に近づいてきた。

『恐暴竜』、それは出会つてしまつたら即撤退が鉄則のモンスター。そんなモンスターが現れてしまつたのだ。

「なつ・・・なんなんだ。このモンスターは・・・」

ついミライがつぶやいている中、ハンターは諦めたようなため息を吐いた後おもむろに彼の背中にある双剣を引きぬいて、

「早くその重い荷物を捨てて逃げる！－その荷物とお前の命どっちが大切だ！－」

と急に大きな声を出した。

急に言われてビックリしたミライは、言われるがままリュックを降ろした。

・・・とにかくミライは一つ気がついた。
きっとこのハンターはこの『イビルジョー^{バケモノ}』に勝つことができない。しかし自分を逃すためにあえて勝てない相手と戦おうとしているのではないか、と。

しかし、ハンターは何でもないようだ。

「大丈夫！なんとかなるさ！」

と、言っているが『イビルジョー』はコダレをダラダラ垂らしつつ今にも襲いかかりそうだ。

「絶対に追いつく！だから早く行け！」

そういうながら片っぽの剣を『イビルジョー』に投げた。その剣は見事にイビルジョーの片目に当たつた。ハンターってスゲー。

『イビルジョー』の雄たけびが凍土にこだまする。

「絶対に追いついて来いよー！」

そう言いながら全力で逃げ出すミライ。

ハンターの姿が見えなくなる。

ハンターのものであらう絶叫が響き渡る。

・・・どれだけ走ったのだろうか。

もう足の感覚がなくなっていた。

小高い丘の頂上でミライは足を止めた。

意識がもうひとつしている

「さあ、おまえの手でやる。」

ホットドリンクを飲んでるので凍え死ぬ」とは無いだろ？が、モンスターに襲われそうで怖い。

村までもう少しだ・・・そう思つたとき不意に足がもつれた。
やばい。ここでこけてしまつたらマジで死ぬ。

しかしリリィはそのままひけて山を転がるよに落ちてしまった。

ミライの視界が狭くなつていいく

そしてついにミライの意識が断絶した。

「良かつたー皿を覚ましたんですね！」

そんな二つのやつ声が聞こえる・・・
すごい暖かい。やつかこには天国なんだなーとミライが超適当な事を
を思つてゐる、

「すいません！早速で悪いんですけど、クエストがたまつてゐる
です！」

・・・・・は？

「ちよつ、・・・え？」

ミライが混乱してゐる、

「ああ、ハンターさん、がんばつてこきましょー！」

ここは天国ではなくユクモ村である。

そしてミライはハンターになつてしまつていた。

プロローグ？（後書き）

どうでしたか？
感想待ってます。

第一話（前書き）

デスジャギィ編です。多分すぐには終わると思います。

第一話

「・・・・ハンターになってしまった・・・」

ミライはついつぶやいてしまった。

どうやらコクモ村の人はミライの事を凍土から来たハンターだと思つてゐる。

「・・・・違う・・・きっと俺は旅商人だったはずだ」

でもどうじょうか。考えてみよつ。

正直に話してみる？

そんなこと言つてもだれも信じてくれないだろ？

逃げる？

でも逃げ出したらなんか後味が悪い。

しかもなんにも持つてないし。絶対飢えて死ぬ。

しうがない、頑張つてみるか。

「とりあえずそれっぽく見えるように防具を着てみるか

そう思いミライは近くにあつた大きめの青いボックスのような物を開けてみた。

中に入つていたのは・・・ユクモ村の工芸品だろうか、大きな笠や、袴などが入つっていた。ありがたい。

早速着てみると怖いぐらいぴつたりだつた。

そして武器の方も見てみたが、こちらも、工芸品のような少し古びたものが数種類あつた。

「まあ、あの人は双剣を使ってたからな・・・双剣にするか

ハンタ

または本者のハンターが万が一ゴクモ村に来た時に辻襷が合ひつとうに・・・ね。

そしてミライが双剣を背中に装備し、先程の女の子のところへと、彼女は甲高い声で、

「やつと起き上がりましたね…… さあ、早速クエストを投注してください……」

「つつともなんかお勧めのクエストとかないの?」

「そうですね~。最近はこの村の近くにある渓流で、『ドスジャギ』が現れて周りの家畜などを襲っていて被害がすごいですね」

「じゃあそいつを早いうどこいつを倒さないとヤバいんじゃないのか?」

「はい~

「わかった、じゃあそのクエストをやるよ」

「わかりました~。でもハンターさん回復薬とか何も持つてないですから大丈夫ですか?」

「ん~でもお金全く持つてないからな・・・」

「じゃあ私がお金を貸しますよ~! 貸したお金はこのクエストの達成金でかえしてくれればそれでいいです!~」

「そう? ジャあありがたく

そしてある程度のお金を貸してもうつた//リイは道具屋に行つてみると、

「うん？君、見ない顔だね。どうしたの？」

男の人にはきなり大きな声で話しかけられた。しかしは何も喋っていないのに。

「どうしたんだい？何か買いたいのだろう？」

「あっ、はい」

そして//リイは回復薬や砥石などを購入した。
こつしてみると本当にハンターみたいだ。
そりゃあ男の子なら一度は夢見る職業だもんな。
・・・よし大丈夫そうだ。行こう。

といいで疑問が生じた。

「どうやつて渓流に行くんだ？」

考えてみればそうだった。どうだ？歩くのだろうか？・・・はあ
しかし女の子はそれを否定して、

「なに言つてるんですか？ガーグアに乗つて行くんですよ

そつかこの辺りの主な交通手段はガーグアだったつけ。

「ありがとう。行つてくれるよ」

「はい！行つてらっしゃい」

そんな明るいクエスト嬢の声を聞きながら、ミライはガーグアの後ろの荷台に乗つた。

ガーグアが動き始める。

あまり心地よいとはいえない乗り心地だが、我慢するしかない。でも実は結構嬉しい。昔の夢がかなつたから。確かにモンスターは怖いけど。まあいつも重い荷物持つてたから体力も人並み以上にはあるはずだし。

「うーん、まあなんとかなるかな」

相変わらず呑気なミライだった。

第一話（後書き）

ドスジャギイ編とか言っておきながらドスジャギイが話の中にほとんどないですね。きっと次べらこには出てきてくれる感じでしょう。

第一話（前書き）

前回は、 もの『デスジャギー』に挑戦だーといつ感じでしたが・・・

第一話

クエストが始まった。

ミライは事前に村で貰っていた地図を広げた。

「うーん、ここがコクモ村だからこの場所はだいたいここから辺かな
まずは自分の居場所を突き止めなければ始まらない。
今の場所がわからないまま突っ込んで、迷子になつてモンスター
の討伐どころではなくなつてしまつ。

そして周りを少し歩くとすぐに自分の場所がわかつた。
もともと地図を読むのは得意なのだ。

「これくらい出来なきゃ行商人なんてやつていけないしな」

ミライは暫定的にいくつかの場所に数字を振つた。
こつしておく事でいくらか地図が分かりやすくなるからだ。

「よし、まあとりあえず手当り次第まわつてみるか」

今回の討伐対象は『ドスジャギ』といつ『ジャギ』や『ジャギ
イノス』などの親玉のような奴らしい。

また、『ドスジャギ』はその他のモンスターよりも一回り大きい
そうだ。

そして一番の見分け方は顔のところについている大きなエリマキの
ようなひだひだだ。

これは直接写真を見せてもらつたからわかる。

数歩歩き回つてみると、『ジャギィノス』を見つけた。

とりあえず肩慣らしにこいつらをやつつけよつと思つて、ミライが双剣を背中から抜くと『ジャギィノス』がミライの気配に気づき、ミライの方を向き叫び声をあげた。

覚悟を決め『ジャギィノス』に斬りかかるミライ。

「うおおおおおおおおお！」

ミライの攻撃は当たつた。しかしあまり『ジャギィノス』にダメージは与えられていないうだつた。

しかし幸いにもこの双剣という武器の種類は全体的に軽い武器だったのでミライはそのまま次の攻撃に移ることができた。

三回、四回と攻撃を当てていくとブチつという小気味の良い音が聞こえて『ジャギィノス』のうちの一匹が倒れたまま動かなくなつた。そしてそれを確認したミライは残りの一匹にむかつていった。

ようやくすべての『ジャギィノス』をミライは倒した。

「はあはあ・・・・・はあはあ」

一匹田は意表を突いて倒したが、一匹田からは『ジャギィノス』達も慎重に襲つてきた。

そしてやつとのことで一匹田の『ジャギィノス』の息の根を止めることができたのだ。

「・・・・疲れた・・・・・」

しかしそまだ『討伐対象』を倒すどころか出合つてすらこないので、ミライは双剣をしまつてまた歩き始めた。

數十分エリア内を歩きまわつた。

その結果『ジャギー』たちの巣のようなところを見つけた。そしてやつとのことで『ドスジャギー』を見つけた・・・

「つたくも～。どんなだけ遠くにいるんだよお～」

しかしだいぶ探ししまわったので疲れたが、結構沢山のモンスターも倒したし、自信もついた。

「わあーとつととせつけるかーー！」

『ドスジャギー』がこちらに気付いた。叫び声をあげる。やはり親玉は雰囲気が違つ。睨まれるだけで気圧されそうだ。しかしそんなものに負けてはいられない。ミライは双剣を背中から引き抜いて『ドスジャギー』にむかって駆け出した。

「こいつをえ倒せば村に帰れる。
そう、ここつさえ。

第一話（後書き）

すみません。今回も『ドスジャギイ』が全然出てきていません。
でも次こそは絶対出します。
頑張ります。

第三話（前書き）

皆さんあけましておめでとうございますーー。
今年も頑張って行きます。
よろしくお願いします。

大きな声で叫んで突撃していったミライだが内心めちゃくちゃ緊張していた。

(やべえ……超怖え……
しかもこんな奴本当に倒せるのか?)

そんなことを考えていたミライに『ドスジャギ』が接近してきた。そしていきなり噛みついてきた。

・・・むひてヒット。

「う、うがつ……・・・・・げほつ」

今までのモンスターたちの攻撃はだいたい防具のおかげであまりダメージを受けることは無かったのだが、ここはやはり『ドスジャギ』攻撃が重い。

とりあえず距離をあけ、回復薬を使いつづけ。これでこくらかはマシになる。

『ドスジャギ』はミライに再び噛みついたと距離を詰めてくる。しかしミライも同じ攻撃を何度も当たつてあげるほどお人よしではない。

『ドスジャギ』が噛みつく為に顔をあげた瞬間ミライは『ドスジャギ』の正面から側面にまわりこみ、両手の剣で斬りつけた。うめき声をあげる『ドスジャギ』。ミライはそのまま連續で斬りつけた。

しかしそこまでだった。急に『ドスジャギ』が後ろにさがり、叫び始めたのだった。

「なんだ？ 急に叫びだして」

するとそこからじゅうの穴からたくさんのが『ジャギイ』や、『ジャギイノス』が現れた——それぞれ八匹くらい。

「ふつ・・・ふざけんなーー。」こんなにたくさん相手にできるかーー！」

そして『ドスジャギイ』が攻撃命令をだした。

すべてのモンスターたちがいつきにミライを睨みつけた。

32 もの鋭い眼光がミテイに龜いかかる

そして次の瞬間、エイにむかってたくさんのモンスターが囁みこってきた。

必死に応戦するミライ。しかし数の利は相手にある。あつといつ間に端つこの方に追い詰められてしまった。

『ジャギイノス』の噛みつきを回避して逆に斬りつけるミライ。

そしてたくさんの相手を相手どる。

しかし結局すべての干ノニ

だが、『ドスジヤギ』は隣のエリアに移動していただけだった。

上仲間を呼ぶことはなかつた。

「よっしゃ！ もう何もこないみたいだなー！」

この機会をチャンスとみたミライは、全力で『ドスジヤギイ』を連続で斬りつけた。斬りつけまくった。

そしてついに『ドスジヤギイ』の体が宙をまこ、やがて地面上に呑きつけられた。

「やつた！」

両手をあげて喜んでいる『ライだつたがしかしそれが災いした。急に起き上がつた『ドスジヤギイ』に反応できなかつたのだ。そしてその鋭い牙によつて『ライの脇腹がえぐられた。

第三話（後書き）

さすがに〇時に投稿は出来ませんでしたorz
・・・残念。
しかも全然書いてません。

第四話（前書き）

皆さん、おひさしぶりです。

やつとのことで『ドスジャギヤ』編終了です。
しかし今回はやつつけ感が凄いです。

一応言い訳はあります。詳しく述べて後書きを

脇腹をえぐられてしまつた。

しかしそれよりも、人間の体がこんなにも簡単に引き裂かれてしまつたという驚きがまず出てきた。

そして次に遅れて壯絶な痛みがニーハイを襲つた

『ドスジャギイ』
脇腹が焼けるように痛い。意識が遠のいていく。
が遠くで喜びの叫び声をあげている気がする。

「くつそ・・・・・こんな・・・所で・・・死ぬのか・・よ・・・・

血を口から吐き出しながら、ひりひりと搔かれていた。

いや、・・・こんなの、・・・嫌だ、・・・！」

確認するようにアドバイスをください。

「ハハハ……おれがおれのことを倒す……」

その瞬間ミライの中の何かが変化した。
目の色が変わり、無表情になつた。
それだけではない。手に持つていた双剣も赤みを帯びている。

「…………フッ」

短く息を吐き一瞬で『ドスジャギイ』との間合いを詰めるミライ。

そしてそのまま『ドスジャギイ』の胴体を切りつけた。

ついよろめいてしまう『ドスジャギイ』。しかし『ドスジャギイ』は、必死で踏ん張りそこからミライに噛みついた。

通常のミライなら絶対に避けられない一撃。しかしその攻撃をミライは紙一重で避けた。

『ドスジャギイ』の顔面がミライの目にあらわれる。

『ドスジャギイ』に驚いた表情が浮かぶと同時に、ミライの乱舞が

『ドスジャギイ』に炸裂する。

顔に、胴体に、脚に、ミライの攻撃が当たる。

「ハアアアアアア！……！」

そして最後の一撃を当てた時ついに『ドスジャギイ』が吹っ飛び、動かなくなつた。

クエスト達成。

それと同時に、双剣から赤い光が消え、ミライの目も元の暖かい色に戻つた。

しかしそのままドサッと倒れこんでしまつた。もともと脇腹をえぐられてしまつている体で無理矢理うごいたツケがまわってきたのだ。遠のいてゆく意識のなかでミライは考える。

(『ドスジャギイ』は……倒したよな？・・・まさかまた起きあがつたりしないだろうな……しかし今のは何だつたんだ？俺が俺じゃないみたいな感じ・・・くそつ・・・わかんね・・・・・・)

そしてそのままブツコとミライの意識が途切れてしまった。

「・・・そしてまたここに戻つてくるのか～～」

ユクモ村のベットで再びミライは目覚めた。

いつの間にか装備品が無くなっている。まさか誰かに盗られたというのではないだろう、親切な人が外してくれたのかな？後でお礼を言わなきや。

「さうだ脇腹の傷は～っと・・・うわっ！～！いつてえ～！」

しかし瞼みつかれた時よりはマシになっていた。でも白いはずの包帯が赤色になっていた。

「ひひ・・あつ！そだーあの後どうなったのか知りたいな」「

無理矢理体を動かして外に出るミライ。そして周りを見わたすとすぐくエスト嬢はいた。

クエスト嬢はミライに気がつくと驚いたような声をあげながら、慌てて駆け込んできた。

「ちょっとーーなにやつてるんですかーー今あなたは絶対安静の状態なんですよーー！」

「いっ、いやーあのクエストが結局どうなったかちょっと知りたかったし。」

「あ～あれの事ですね。う～んそうですね。結果から言いますと、」

と、クエスト嬢は少し間を開けて言い放った。

「ズバリ、成功です！…！」

「おお！…！」

「報酬金もたんまり出でています！…しかも素材も！…やっぱりユクモ村の特産品を防具にするなんて無理があつたんですよ。良かつたですね～。これで新しい装備なんかも作つてもらえるかもしれないですよ！…！」

えつ・・・ちよつと待て。あの防具に無理があつたのかよ。俺そのせいで脇腹えぐられたのかよ・・・・・すげえへこむ。というか悲しい。

「何はともあれ・・・・ハイ！…」ちらがモロモロ全てですよ！

「！」

結構大きな箱を渡された。うおつ、結構重い・脇腹痛いのに…！響
いちゃうじゃん！…！」

・・・といあえず箱を開けてみた。本当にお金が入つてる…ん？でも何か中途半端な金額だ。

「そりゃあそうですよ。だつて私が先にこの箱を開けて貸していた分を回収しといたんですから。」

「なにやつてんだよ…！俺にいうのは一番最初に見たいタイプの

人間なんだよ。」

「やつでしたか？それはすみませんでした。でもこれでもつまらし借りはなしですから、安心してください」

「まあ・・・あつ、ありがとね、お金貸してくれて」

「いえいえ、どうこたしまして」

「じゅあ他のやつも見てみよつと」

中にはいろいろな物が入っていた。『ドスジャギイ』に関連してそうな物から、石ころのような全く関係のない物まで結構入っていて驚いた。

「すげ~な。本当にいろいろな物が入ってるんだな~」

「えつ?なに言つてるんですか?まさか始めて見るわけでもないはずですのに」

「あつ、そうだった。危ない、素に戻つてた。はしゃぎすぎだよな・・・

・俺。

「あ~うん、」めぐ。まあ、ありがとう。今日は脇腹がまだ痛いから寝るよ。じゃあね

「はーーとみづなり。」

さあ、寝るか。

第四話（後書き）

・・・言い訳をします。

今年は2012年といつ事で2012年らしいことをしたいなーと考えていましたところ、急に「そ�だー文字数を2012文字にしよーーー」なんてバカなことを思いついてしまい、実行しました。

後悔はしていません。

第一話（前書き）

「んにちは！　

もうすっかりお正月ムードを消えてしましましたね。
何だか寂しいです。

それではクルペック編スタートです！

第一話

あれから数週間、体も全快した。

「よし！…そろそろ次のクエストにいくかっ！」

「なに言つてゐるんですか！ダメですよー！」

いきなりダメだ、と言われた。

「えつ？なんで？」

「いやー、だつてハンターさん防具がボロボロなんですよー。この状態でクエストに行つても絶対に死にますって」

「そつ、そつか

「そ
こ
で
！
いまから道
具屋さんのお隣にある加工屋おじいちゃんさんに行つてきて何か装備を作つても
らつてください」

「・・・・うん、オッケー。行つてくる

「でも気をつけてくださいよ、あの加工屋さん結構難しい人ですか
ら・・・」

「えつ？なんだつて？」

最後の方があまり聞き取れなかつた・・・しかも早口で喋つてたし。

「まあ、頑張つてください。応援してますからねー！」

「なんで応援されてんの？俺。^{くだん}頑張らなきゃいけないの？・・・だんだん怖くなってきた。

そう思いつつもミライは件の加工屋さんに行つた。
お店の外から内側は見えないが、逆にそれが怖さを醸し出していた。^{かも}
恐る恐る中に入つてみると、中はとてもなく熱かった。

「なんだこー！…すげー熱い…！」

「なんだとはなんだ！…」のボンクラめが！…」

声の方を見てみると、おじこちゃんが顔を真つ赤にして怒っていた。
迫力がある。すごい怖い。

「あ、あなたが加工屋のおじこちゃんですね

「やうだ！それでどうかしたのか？」

「あの・・・俺に防具を作つてくれませんか？」

「・・・防具つてことはお前、ハンターつてことだな

「はい。でももつといい装備が欲しくな・・・」

「ちよつと待ちな。お前、田を見せてみる」

急に言われた。結構怖かったので素直に従つこととした。

「ふむ・・ふむ・・ほーつ、そつか！・・よからつ・・何でも作って
やるー！・・！」

認められた！？ 目を見ただけで何がわかった？？

「えつ？は、はい。ありがとうございます」

「で、防具だつたな！」

おじこちゃんの顔がにこやかになる。

「ええ。 そうです・・・？」

にこやかになつてもなんか怖い。裏がありそ�で。

「お前、なんかモンスターの素材を持つているか？」

「『ドスジヤギイ』の素材なら持つてますけど」

「よしーならそれを持って来いーー！」

「はい。わかりました」

数分後、ミライが持つてきた素材を見て加工屋のおじこちゃんは驚いた。

「スゲホじやねえか。これなら結構いい防具が作れるぜーー！」

「そうなんですか？」

「せうとむかわーちゅうだけ時間をくれー！すぐいい物を作つてやるぜー。」

そうこうしておじこちゃんは奥のかまどの方に行つてしまつた。

「よし。これで防具は大丈夫だな。でもまだ時間がかかるつて言ってたからなー。うん、何かクエストがないか聞いてくるか」

ミライは加工屋を出で、クエスト嬢のところに行つた。するとクエスト嬢はミライをなぐさめるように喋つた。

「しようがないですよ。あのおじこちゃんはああいう性格なんですよ。だから決してハンターさんが悪いんじゃないんですよ。」

「えつ？なに言つてんの？」

「はい？だつてハンターさん断られたんじゃないんですか？」

「いや、なんか田を見せたら認めてもらひえた」

「それつてすうじこ事じやないですか！！」

「へへそつなのか」

「そつなんですよーー。」

「そつだ。そりいえば何か新しいクエストつてない？」

「あー、はーーーこま出でいるクエストは『クルペッ』などです

かね。知つてます?『クルベツ』

「いや。知らないな」

「『クルペッ』は自分以外のモンスターの鳴き真似をしてそのモンスターを呼び寄せちゃうモンスターなんです」

「ユニー、ジヤあんのクヒストやつてあらうかな」

「はい。・・・ちょっと待ってください。」のクエスト他にも参加
者がいるみたいですよ!」

גָּדוֹלָה

「今回のクエストは、複数人で戦うみたいです」

「ふうんそうなんだ。」
「つてえつ？」

まつ・・マジかよ。まあ心強いけど。嬉しいけど。

「はい！！！それでは頑張つてくださいね！！」

そのと遙くから大声が聞こえた。

「うん。わかつた

「・・・だそうですよ！早く行つてあげてください」

早足で加工屋に向かつたミライだったが、

「遅い！…」

怒られた。

「まあいい。ほれ、出来たぞ！」

渡された防具はすぐかっこよかつた。
早速装備してみると何だか力が湧いてきた装備が違うだけでこんな
にも違うのだろうか。

「本当に凄いやー。ありがとー！」

「おひー…また来いよー…！」

「はいー！」

そして移動用のガーグアにミライが乗り込むとゆっくつと走り出しだ。

共同戦線を張る仲間はどんな奴なんだろう。
まだ見ぬ仲間の姿を思い浮かべながらミライを乗せてガーグアは走
り続ける。

次の狩り場は砂原。灼熱の地。

第一話（後書き）

やつぱりスジャギーの時のように始めはあまりモンスター達の事が出てきませんね。
しかしさは新キャラも出てきますーー。
お楽しみにー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6440z/>

モンスターハンター～偽者の剣～

2012年1月8日21時52分発行